

琉球大学学術リポジトリ

[巻頭言] 沖縄農業の活性化を目指して

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 泉, 裕巳, Izumi, Hiromi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015410

巻 頭 言

会長 泉 裕 巳

昭和37年沖縄の本土復帰前、米国の施政権下において研究施設・設備はもとより、学会出席という研究者にとって最も重要な研究情報の交換・収集すら自由になし得なかった時代に、当時の関係者が沖縄農業の発展とお互いの研鑽の場として強い使命感と情熱をもって沖縄農業研究会が設立された。当時の研究会は、お互いの研究発表の場としての役割が大きく、また研究論文を投稿できる唯一の学術誌でもあり、会員にとっては研究成果の公表の場として貴重な存在であった。

昭和47年沖縄の本土復帰と同時に、それまでは米国民政府発行のパスポートがなければ学会出席のためであっても本土への渡航ができなかったが、これが自由になり、研究者もそれぞれの学会に所属して出席・発表も自由にできるようになった。遠隔の地にあるため、研究情報の入手が困難であった当時の沖縄在住研究者にとっては、長年の念願が叶ない双手を挙げて喜んだものである。

復帰後の昭和52年、本会が事務局となって日本熱帯学会を当地で開催し、県外からも多数の学会員が参加し、2日間に亘って研究発表と「沖縄における農業の振興とその技術的問題点」と題したシンポジウムが開催され、盛会であった。

振り返ってみると、本土復帰までの間は本研究会の主目的であった研究成果発表の場としての役割が十二分に発揮された時代であったと思われる。その後、前述の理由もあってか研究会誌への投稿論文数が減り、編集担当者の悪戦苦闘が続き、研究会活動も沈滞し、それまで年間2号を発行していた会誌も遂に合併号にせざるを得ない破目になった。理由はいろいろあるにせよ、復帰という歴史的転換を契機に会員の研究成果の発表の場が国内の諸学会と直接つながり、「オリジナル論文については中央学会誌に」という気運が会員の意識として定着してきたことが大きく働いているのではないと思われる。この現象はむしろ喜ぶべきことであって悲観するには当たらないことと受け止めている。

このような変遷をふまえ、研究会の活性化を図るために会員の英知を結集して研究会活動の再構築を図る時期と判断された当時の宮里清松会長は、昭和60年10月活性化の方策を検討するための委員会を設置し、昭和61年に委員会の答申を受けて総会に提案し、承認された。

その中の幾つかは既に実施に移されているが、中心課題であった会誌内容の刷新等については今だに手付かずの状態にある。これを今回から活性化の第一歩として、従来通りの研究成果発表の役割に加えて、沖縄農業に関する論説、新技術の紹介、研究・行政情報など農業現場の役に立つ会員相互の学術情報総合誌としての内容に改めることにした。

農業生産は、生物（動植物）の有する生命力の展開に依拠して成り立つものであり、複雑な要因が関係する生命および自然をより有効に利用して人類にとっての有用物を産出する産業である。よって農業に関する研究は、それぞれの条件下で複雑多岐にわたる生物生産の要因を解明し、分析と同時に総合と創造から生物生産、生物利用の法則を見出し、技術を組み立てることを意図している。つまり生物の生産のメカニズムを解明し、分析を行ない、生産要素の効果的な組合せによる技術の構築を図り、生産技術への展開を試みると同時に生産システムの最適化を図ることが目的である。

試験研究機関で行っている諸々の研究成果を技術化し、逸早く農業生産の現場に移転していくためには何よりも情報の伝達が正確かつ円滑に行なわれることが大切である。また確立された新技術は多方面で活用されることが更に重要である。一方現場における問題点を把握し、この解決を図ることも研究の重要な使命でもある。

これからの研究会活動を研究と現場をつなぐ橋渡しの役割に重点を置き、諸々の課題に取組み、真に沖縄農業の発展に役立つようにしたいと考えている。